

■ 公開討論会「都市のにぎわいと安らぎを考える」 ■

日時：平成22年7月17日(土) 16:00~18:00
場所：広島大学東千田キャンパス 208 講義室(広島市中区)
プログラム：

1. 材料提供

マネジメントオフィス HARADA 代表 原田 弘子
広島市都市活性化局水の都担当課長 松岡 友夫

2. 討論会

(コメンテーター) 広島大学 藤原 章正
(総合進行) 広島大学 戸田 常一

主催：日本計画行政学会中国支部、日本都市計画学会中国四国支部

日本都市行政学会第25回中国支部大会開催に合わせて、2学会主催による表記の公開討論会が開催された。ここではそこでの発表および討論会の概要について報告する。

1. 材料提供

公開討論会の前半は材料提供として、府中市中心市街地活性化協議会タウンマネージャー、広島市うらぶくろアドバイザーをされている原田弘子氏、そして広島市内の河川敷におけるオープンカフェ事業を担当する松岡友夫氏から、各々の活動、事業の紹介を交えながら、都市のにぎわいと安らぎに関する発表がなされた。



写真1 原田 弘子 氏

原田氏からは、まず「にぎわいと安らぎの定義」について提言があった。「にぎわい」は、人が集まるなど量的に人が増えること(指標としては通行量や集客数などがある)と、豊かになること、繁盛すること(指標としては収入、売り上げな

どの経済的効果)の2つの意味をもち、また「安らぎ」は、穏やかな、ゆったりした気分を指し、主体の状況に左右されやすく定量化しにくい。その上で、地域のタウンマネジメントをする上で、「にぎわい」や地域活性化に対するまちづくり活動主体の認識が異なっていたり、それら主体間の合意がないと効果的なまちづくり活動が困難となること、また、「用事」(公共施設利用、居住、買い物、仕事など)、「楽しみ」(イベント、祭、レジャー、魅力的な店舗、自己実現など)、「安らぎ」(自然、公園、快適な環境、人とのつながり、喧噪、匿名性、安全・安心、宗教的拠り所など)が、人が集まり繁盛することへと繋がると考えれば、「安らぎ」は「にぎわい」の前提の一つとしてであると述べた。さらに、現在の中心市街地活性化事業では、公共公益施設や都市福祉施設の整備、住宅供給、商業施設の活性化、それらの一体的整備(公共交通など)が重点的に事業展開されるが、「安らぎ」をどう生み出すかは課題であるとしている。

次に具体的な事例として、大分県佐伯市と広島市袋町裏通り活性化委員会の取り組みの紹介がなされた。

佐伯市の事例では、1990年代以降中心市街地の衰退が進む中、02年からまちづくり協議会や市民有志によるまちづ

くり活動等、まちづくりへの気運が高まり、07年に佐伯市まちづくりセンター「よろうや仲町」が設立され、その後の展開へと繋がったとの説明があった。とくに「よろうや仲町」を核として、地域を活動の場とする「用事」を沢山つくり、また「安らぎ」を整備するなかで、シルバー人材センター、子ども会、工芸・芸能グループが活動を展開したことが紹介された。商業的活性化が難しいところでは、商業以外の目的を持つ人をどれだけ多く集めること、場のマネジメントを担う人材を確保することが必要であると述べた。続く広島市袋町裏通り活性化委員会の取り組みでは、繁華街のすぐ南に位置するという立地、エッジが効いた、ファッションブルで個性的で好奇心にあふれた店舗を活かしながら、他地区との違いを際立たせるようという取り組みが紹介された。とくにお掃除プロジェクトをはじめとする、落書き消し、クーポン付エリアマップづくり、勉強会やニュースレター発行などの活動について説明がなされた。

発表の最後に、地域の環境や資源、求められる都市機能が異なっても、まず都市経営の方向性を先に設定する必要があり、その上で、地域資源を活かした、実現可能な「にぎわい」や「安らぎ」の創出を検討するべきではないか、また都市の郊外化、中心市街地の居住・営業のメリットが低下する中で、まちの規模やリソースにあった施策が求められるとの提言があった。



写真2 松岡 友夫 氏

松岡氏からは、広島市が策定した「水の都ひろしま」構想と、それに基づくオープンカフェ事業の取り組み、さらに広島駅周辺地区整備が紹介された。

「水の都ひろしま」構想については、平成2年に広島市内の河川管理者である

国・県と市が連携して水の都整備構想を策定後、平成15年に市民と行政が協働して「水の都ひろしま」構想を策定するまでの経緯について説明がなされた。この構想は、水辺などにおける都市の楽しみ方の創出、都市観光の主要な舞台づくり、「水の都ひろしま」にふさわしい個性と魅力ある風景づくりを進めることを目的としている。各界の力を結集した方針検討や社会実験が行われた後、平成16年には国交省から「都市及び地域の再生等のために利用する施設に係る河川敷占用許可準則の特例措置について」の通達が出されるに至り、京橋川右岸および旧太田川・元安川の一部において、新たな占有施設設置、民間事業者等による営業活動が条件付きで実施可能となり、オープンカフェ事業が始まった。オープンカフェ事業については、オープンカフェ実施までの様々な試行や社会実験の様子、事業の現状、推進体制(行政、地元住民、専門家から構成される推進協議会、専門部会、出店者選定委員会)、事業スキーム(最長6年の営業期間、営業時間、店舗構造、費用負担、環境改善事業)、店舗形態などについて詳細な説明がなされた。ま

た京橋川のオープンカフェについては3年目に行われた中間評価についても説明があり、新たなにぎわいの創出、歩行者通行量の増加、新たな都市の楽しみの創出、新たなにぎわい、観光のスポットとしての定着、環境改善、まちづくり活動の誘発に繋がったことが報告された。また今後の展開として、京橋川左岸等への拡張、旧市民球場との一体的利用等による水の都としてのシンボル空間づくり、親水護岸・リバーウォーク・アンダーパス等による水辺の景観づくり、水上交通のネットワークづくりを検討していることが紹介された。

広島駅周辺地区整備の推進については、平成15年都市再生緊急整備地域の指定後行われている、若草第一種市街地再開発事業（ホテル、賃貸・分譲住宅、来年春創業）、二葉の里土地整理事業（道路整備、医療施設建設、公園・宅地整備）、広島駅南口周辺再整備（ターミナル整備、店舗・住居建設）の事業内容の説明がなされた。

2. 討論会

材料提供の発表後、戸田先生の進行により、参加者との活発な意見交換が行われた。最初にコメンテーターである藤原先生から、原田氏および松岡氏に対して、コメントと質問があった。



写真3 藤原 章正 先生

原田氏に対しては、にぎわいと安らぎに対してシャ

ープなわかりやすい定義付けを評価した上で、「現在人口減少と高齢化の進む社会で、ユニバーサルデザイン、公平性は、にぎわいという議論でカバーできるのか」、また「過去の都市化のスパイラルを学ぶことで、今後の成熟社会における中心市街地活性化の解決策を見出せるのか」との質問があった。また松岡氏に対しては、広島の水辺空間は、都市の再生の成功モデルであると評価した上で、「広島駅再開発事業と水辺空間をどのようにリンクしようとしているのか」、また「日本では堤外地として水辺空間の利用がタブー

視されているが、河川敷のさらなる大胆な利用、柔軟な利用は考えられていないのか」との質問があった。

これに対して原田氏は、「中心市街地活性化の対策の中では、安らぎという部分が抜けており、公平性やユニバーサルデザインという考え方がないことが問題だ」と指摘し、今後のまちづくり施策の中にそうした考え方を取り入れていくべきだと述べた。また「過去の都市化のプロセスを学ぶことは、直接中活に役立たないが、市民になぜ中活なのかを理解してもらうためには過去の経緯を整理した方がよいという側面はある」と答えた。また松岡氏は、京橋川の事業が元々八丁堀と広島駅の間に位置し、両者をどう繋げるかということからスタートしたものであるとした上で、今後京橋川左岸への拡充、水上ネットワークづくり、他の河岸緑地に店舗やイベント空間の整備を検討していると述べた。また地先利用促進、河川管理者である国・県との調整が課題だが、広島駅周辺再開発事業でも瀬戸内海へのアクセスも考えた河岸利用を検討中であると答えた。



写真5 戸田 常一 先生

この後、参加者から、材料提供者に対する感想や意見、質問を交えながら進められた。広島県外からの参加者、大学生、研究者、地元関係者などからは、各事例における事業効果、民間と行政との意見調整、事業に伴う経済的負担、全体構想に関する質問のほか、「オープンカフェは全て有料だという市民の考え方を変えていくべき」、「広島の都心部を水で結ぶことは重要」などの意見も出された。これらに対して材料提供者である原田氏から「活性化、まちづくり、にぎわいの定義を共有する人同士で事業・活動等に取り組む必要がある」、松岡氏から「水の都のもっとPRをして、新しい展開を期待したい。東京の河岸緑地と比較すると広島は世界に誇れる事例だ」との発言がなされた。

最後に藤原先生により公開討論会の総括がなされた。まず「集積の是非」として「人が集まることは混雑の元凶だと教えられたが今は違う。半世紀の間に人を集める政策と分散する政策と迷走している」とした。次に「QOLの基準」について「にぎわい（経済活性化）が動力、安らぎ（主観的幸福感）がまちづくりの元気を醸し出すエネルギーとなり、そのバランスが大切である」とした。そして「活性化につながる施策」について「オーソライズ型（一発逆転型：制度変更、都市マスに沿って行う再開発）とゲリラ型（積み上げ型：NPO）を上手く組み合わせないといけない」と提案した。そして「計画行政学会への示唆」として「まちの風土、歴史、文化などを熟知した人、ある程度長い視点で物語を作れる地元の人を発掘することが行政にとって重要である。そうした人材を上手く活用することが大切だ」と締め括った。これをもって公開討論会は閉会した。

(文責：橋本 清勇)



写真4 公開討論会の会場の様子

■ こども環境学会広島大会ワークショップ ■■

ひろしまとヒロシマさがし、未来づくり

～1945～2045、1世紀マップづくり～

日 時：2010年4月24日(日) [13:30～17:30]

場 所：広島市まちづくり市民交流プラザ及びフィールド
(広島平和記念公園及びその周辺)

プログラム

1. ワークショップ開始
 - アイスブレイク：クイズなど(旗揚げ方式など)
 - ガイダンス
2. 現地体験－被爆建造物などを巡って、発見、想像する
3. グループワーク
 - 被爆前の想像マップづくり
 - およそ30年後の想像(未来)マップづくり
4. 発表・意見交換、クイズ王・参加賞(都市計画家や計画スタッフの道具など)

主 催：こども環境学会(2010大会実行委員会)

共 催：日本都市計画学会中国四国支部ほか

参加者：17人(本ワークショップ)

【こどもへのメッセージ】

およそ65年前、広島市に原子爆弾が落とされ、多くの人々がなくなり、まちは一面の焼け野原でした。それでも人々は立ち上がり、今のまちは多くの苦労や困難をのりこえてつくられたものです。まちは今でも被爆した建物や橋などが残っています。被爆した建物などを見て、知って、自分としての何かを発見し、そして、想像し・考え、それを1945年(もし、原爆が落とされなかったら)と2045年の自分たちの地図として表しましょう。

日本都市計画学会中国四国支部としての参加理由は、「まちづくりにおける想像する力、発見する力や感性、それらをこどものときから体験的に学ぶことの大切さ」であるとともに、「被爆体験の継承におけるこどもの力への期待」でした。

1 まち探検へ～被爆建造物めぐり～

まずは、平和記念公園周辺の被爆建造物の探検へと出かけました。その際、資料のメモ欄に、説明以外での発見を記入することを課題としました。

探検した主な被爆建造物等は、旧山陽記念館、旧日本銀行広島支店、白神社、平和大橋、平和記念公園レストハウス、元安橋、原爆ドーム、広島アンデルセン、袋町小学校平和資料館。



2 会場での“1世紀マップ”づくり

(1) マップをつくろう1

～被爆前の想像マップづくり～

A・B班に分かれ、まず、「発見」したことを、言葉や絵でシートに表現し、出しました。

それから「戦争がなかったとしたら、1945年はどんな街だったか」を想像し、ピッタリくる言葉や色などを考え、地図に書き込み、名前をつけました。

A班：川で泳げるえがおのまち

B班：運河のまち広島

両方とも川をテーマとしたのには驚きでした。



(2) マップをつくろう2～およそ35年後の想像(未来)マップづくり～

そのとき、自分は「被爆建造物などをどのように利用しているか、利用したいか」、「被爆建造物やその周りにはどんな姿や利用になっているか、どのようにしたいか」を考え、地図にイメージする色を塗ったり、絵を描いたりしました。

さらに、「被爆建造物などをつないで生かすとしたら」について考えると、両班とも路面電車を大胆に取り入れる結果となりました。

A班：かんこう電車が走る楽しい平和のまち

B班：水と緑と文化と市電の都市



3 発表・意見交換と“都市計画家の道具”

最後に、作品を発表し、意見交換を行いました。会場からは、「住宅地が多い理由は?」、「官庁を動かす理由は?」など、論文発表並みの質問も出ましたが、こどもたちがスラスラと応答したのは脱帽でした。

“都市計画家の道具?”と称して、眠っていたスクリーンなどの“遺物”を持ち帰ってもらいました。都市計画のイメージダウンにつながるのではと一抹の不安を感じましたが、後の祭り。(文責：山下 和也)

■ 第1回 都市計画サロン ■■■■■■■■■■

「里山あーと村の10年～里山の現代的活用をめざして～」

日時：2010年6月18日(金) 19:00～

場所：コンフォートホテル (広島市中区小町3-17)

講師：前田文章(都市計画プランナー)

参加者：15人

都市計画サロンは、会員、都市計画の専門家などに話題を提供して頂くためのテーマ・場を設定し、フランクな意見交換を通じて、会員相互の情報・技術等の交流を促進することを目的として、年3回程度実施している。

本会合は、都市計画プランナーの前田氏が広島を去られることになったため、前田氏の里山アート村におけるこれまでの活動をふり返り、残った研究者への引き継ぎの役割も含めて開催したものである。

講師から自己紹介として、これまで取り組んできた仕事の紹介があった。1986年に仕事を始めて、日本で一番最初かな?と思われるワークショップに携わった。計画を作るよりも実際に何かを作る、そういうことに興味を持っていた。あいている土地に遊び場をつくる、廃材を集めて小屋を作ったり壊したり、昔の遊びと今の遊びを比較、これは賞をもらった。全国初の里山公園の横浜の公園にかかわった。

次に、このサロンのテーマである里山あーと村については次のような紹介があった。里山あーと村は広島市のピース&クリエイト事業で‘95年からスタートしたもので、基町高校や矢野南小学校などと同じ。ワークショップからはじめた。アクションプログラムを時間をかけて作ろうと。里山コースとたんぼコースに分けて倉庫を作ったりした。何を作りたいかではなく、何をやりたいか。まずはトイレ、会長と副会長がパワーショベルを出して作った。4年目でやりたい人が3人いて「できちゃった水車」を自分たちで作った。この段階で「手作りの里のイメージ」になる絵を描いた。5年目で立ち上げたそばの会は今も自分たちで育てたそばを挽いて食べている。9年目には水車を使って発電。アート村の功績は年に1度のジャズライブかな。一人のプロと地元の人が加わっての演奏会。少しは地域のために貢献できたかな?と思っている。

前田先生が里山アート村に注いできた思いをこの文面にすることは難しいが、事業費を入れて造成して公園を作るという手法とは全くちがった手法で作られた「里山アート村」という公園を紹介していただき、興味深い内容だった。

なお、参考として、里山アート村 (所在地は、広島市安芸区阿戸町) において、大きな成果となっているジャズラ

イブは、今年は8月29日の予定となっている。

会場からの質問は、苦勞した点や核となる人材の必要性、都市計画プランナーとしていかに住民と距離感を保ってつきあうか、そのためのコツが重要である点など、引き継がねばならない視点が多かった。また、この活動中、生死を彷徨うような大げがをするなど、まさに身体をはった地域づくりが重要であることが示された。



説明する前田文章講師



会場風景

(文責：北本 拓也)

■ 第2回 都市計画サロン ■■■■■■■■■■

2009年度、石川奨励賞を受賞した『都市計画家石川栄耀都市探求の軌跡』の著者の1人である西成典久氏(香川大学経済学部准教授)により、「石川栄耀が見た近代日本都市計画ー都市広場をめぐる活動を通じてー」と題して話題提供をいただき、意見交換を行った。

日時：平成22年9月18日(土曜日) 15:00~17:00

場所：広島県情報プラザ・会議室(広島市中区)

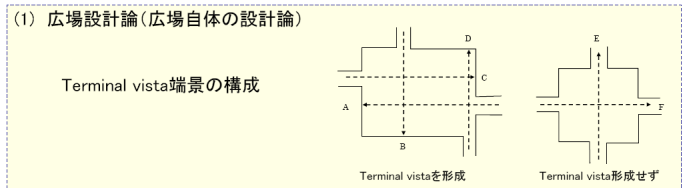
参加者数：17人

《講演の概要》

石川栄耀は、内務省都市計画地方委員会の技師第1期として採用され、名古屋、東京、那覇、北九州など多くの都市づくりに尽力した。戦前から戦後復興期であり、生産基盤づくりが重視される中、生活に根差した都市計画を主張した。人々が生産活動から解放される「夜」に着目した「夜の都市計画」である。とりわけ、日本の伝統的な都市の社交の場として、盛り場、商店街に着目し、盛り場の中に社交交歓のための広場づくりに尽力した。当時としては極めて少数派の視点であり、ユニークでロマンティストである石川の趣味と揶揄された。

しかし、そこには現在に通じる都市計画の本質的なテーマがあった。都市計画の本質は、道路、河川、下水道などの整備であり、盛り場は付随的なものであり通俗的なものという捉え方が一般的であった時代、一方で折からの大正デモクラシーの潮流に乗って、にぎわいの創出、人と人とのつながりをつくる盛り場こそ、都市の本質という見方が出てきた。これは現代的課題と重なり、近年、石川の再評価につながっている。

石川が手掛けた広場の代表的なものとして、戦前の名古屋大須広場、戦後復興期の新宿歌舞伎町広場、麻布十番広場等がある。いずれも土地区画整理事業の中で減歩により創出された土地に整備された広場である。ちなみに、歌舞伎町の命名は石川によるものである(筆者)。



広場の設計思想は、欧米視察で出会ったイギリスの都市計画家アンウィンから影響を受けた。袋路のような閉じた空間(街景封鎖)を基本とし、劇場による囲い込み



図及び写真：発表資料より抜粋

や、T字路、曲線を多用したターミナルビスタの形成を広場づくりの条件とした。その典型が歌舞伎町広場である。

麻布十番広場は構想段階では隣接して映画館ないし百貨店の立地が計画されていたが、戦前からの商店街であり、区画整理の換地上の制約からそのような形状では実現しなかった。しかし、1980年代、地元商店街がこの空間を商店街の中のコミュニケーションの場として利用できるように改修し、石川の思い描いた広場と近い使われ方になった。

かつて日本には、屋外で飲み食いを主体とする楽しみ方があった。都市公園の基本形は四方を道路で囲むため、民地から切り離される。また商業活動を規制する。石川は、「法定都市計画ではいい都市はできない」として、みんなで考え、様々な主体が協力して取り組む『法外都市計画』が日本には必要であると指摘している。人と人とのつながりから都市を総合的にとらえ、『公正さが求められる法によるガバナンスから、達成されるべき全体像を共有するまちづくり運動へ』と、新たな局面を迎えるために実践し、葛藤した。

《意見交換》

意見交換では、会場から「ヨーロッパの広場は本来政治集会の場



であるが、石川は広場の何を日本に持ってこようとしたのか」「公共空間には各々公物管理法があり全体を統括する理念・法がないことが問題」「石川は反発を受けた面はあるが、主流になりえなかったということではない。石川をしてもそこまでできなかったとの捉え方もできる」「広島戦災復興における石川の悩みとはどんなものがあったのか」「問題解決より、都市づくりの理想に走りすぎたのではないのか」等の質問や意見があった。紙面の都合上質疑の詳細は伝えられないが、石川栄耀という偉大な先人に若手研究者が真摯且つ果敢に取り組み、参加者全員で先人の功績の現代的意義を改めてかみしめる貴重な機会であった。

「新しく幾つかの都市を見ている中に自分の頭の中に大きな変化が起こった。それは『都市計画』は『計画者が都市に創意を加えるべきものではなくして』それは都市に内在する『自然』に従い、その『自然』が矛盾なく流れ得るよう、手を貸す仕事であるーという理解である」(石川栄耀(1954)『新訂都市計画及び国土計画』序文(産業図書)※「都市計画家石川栄耀 都市探求の軌跡」あとがき(鹿島出版会)より引用)

西成先生には、昼前に広島入りしていただき、社会実験中の水辺のオープンカフェ、広島お好み村、盛り場の中の広場、太田川の環境護岸、平和公園などをご案内した。



(文責：佐伯 達郎)

■地域活動助成事業平成22年度2回まちづくり講演会■

牛窓しおまち唐琴通り保存と活性化プロジェクト ～地域を元気にする住民主体・協働のまちづくり～

日時：平成22年9月4日（土）13：30～15：15

場所：瀬戸内市牛窓公民館

講師：NPOコミュニティサポートセンター神戸

（以下、「CS神戸」） 中村順子理事長

参加者：40名

主催・共催：牛窓しおまち唐琴通り保存と活性化プロジェクト（以下「プロジェクト」）・岡山理科大学

後援：瀬戸内市 瀬戸内市社会福祉協議会

1. はじめに

岡山県瀬戸内市牛窓町で、江戸時代に朝鮮通信使が寄港した歴史ある港町の風情を残す“しおまち唐琴通り”一帯の町並み保存と地域の活性化を目指して、「牛窓しおまち唐琴通り保存と活性化プロジェクト」が昨年10月に発足して住民有志によるまちづくり活動が始まった。

今回の講演会は、市民活動団体の立上げ初期にありがちな、プロジェクトが直面する課題を乗り越えて、今後、住民主体・協働のまちづくりを推進し活動を発展させ地域を元気にしていくために、市民活動や中間支援活動に豊富な実績と経験を持つCS神戸中村順子理事長（さわやか福祉財団理事）に講演をお願いした。



しおまち唐琴通り



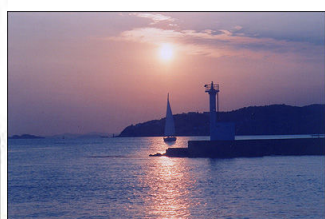
自然倒壊した空き家

2. 牛窓の現状

瀬戸内市の人口約39,000人、内牛窓町の人口は約7,200人である。瀬戸内海に面して位置し、日本のエーゲ海と呼ばれる風光明媚な自然環境と温暖な気候に恵まれ、西日本有数のヨットハーバー、シーカヤック、オリーブ園、朝鮮通信使ゆかりの歴史文化資産など、マリンレジャー、観光リクリエーションゾーンとして知られ、広域圏から観光客が訪れている一方で、かつて、風待ち潮待ちの港町として備前一の繁栄を誇ったしおまち唐琴通りを中心とする旧市街地は、中心商店街の面影は今やなく、一帯の地域では空き家も目立ち中山間地指定を受けるなど地域の衰退が顕著である。



オリーブ園から望む風景

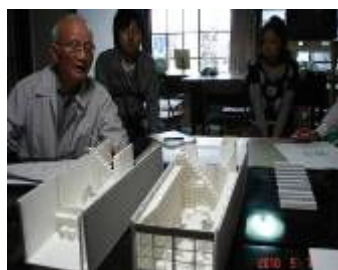


牛窓の夕日：夕陽百選認定

3. プロジェクトと大学の協働・連携

プロジェクトが立ち上がってから10か月であるが、既に会員は90名余となった。これは地域の活性化に多くの住民が期待を寄せていることの表れでもある。本学は、当初から地域と連携した活動に取り組み、これまでに牛玉宝印札掛け作成イベント、タウンウォッチング、まちづくり講演会（牛窓今昔未来物語—総合計画を読み解けば見えてくるもの、講師：著者）、更に、市の助成金を得てプロジェクトと協働で実施するしおまち唐琴通り町並みデジタル化事業、町家修復計画などに、「ヨソ者、若者、バカ者」の力を注入して地域と共創するまちづくりに取り組んでいる。

現在、瀬戸内市観光協会が、しおまち唐琴通りに面する町家を借り上げて開設している観光案内所に、プロジェクトの活動拠点を置き、また、同時に本学が牛窓で活動するためのサテライトラボを置くことが合意され、今後一層密にした地域連携活動を企図している。



町家修復ワークショップ タウンウォッチング・WS

4. 講演会を終えて

講演会には、住民、行政関係者、市民活動メンバー、大学生など、多彩な人達の参加があり、講師が阪神大震災を経験した教訓とその後のコミュニティづくりの実績を基に、市民活動には、共助の文化を醸成すること、自己完結せずにみんなで協働すること、目的・情報を共有することなどの大切さについての講話に熱心に聞き入っていた。

特に、地域を元気にしていくためには、地域の人々の“つながり”や“居場所をつくる”ことが大切であることについて、事例を基にした紹介は、これから取り組むプロジェクトの活動に大いに役立つ内容であった。講演会終了後の懇親会では、更に参加の仕組みや人的資源の発掘と活動の活性化などの具体的課題について意見交換を行うことができ、地域が再生・発展していくために市民活動が取り組むための多くの有意な示唆を得ることができた。



（文責：岡山理科大学総合情報学部建築学科 緒方 清隆）

氏名：奥嶋 政嗣 (おくしま まさし)
所属：徳島大学 大学院ソシオテクノサイエンス研究部
エコシステムデザイン部門 准教授

■略歴

1969年(昭和44年)生/滋賀県甲賀市出身/1992年3月京都大学工学部交通土木工学科卒業/1994年3月京都大学大学院工学研究科修士課程応用システム科学専攻修了/1994年4月~2002年3月(株)日本総合研究所研究員/2002年4月~2007年3月岐阜大学工学部社会基盤工学科助手/2005年3月博士(工学)取得/2007年4月~2008年11月同助教/2008年10月12月徳島大学徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部准教授~現在に至る



■自己紹介

これまで都市交通計画の分野において、現実のデータを用いた実証的分析による研究を行っています。8年間勤務した(株)日本総合研究所では、阪神高速道路のリアルタイムでの交通管理のための交通シミュレーションシステムの開発を行うなど、各種の交通現象の推計システムの開発を行いました。また、学位論文では、現実の都市道路網を対象として、交通管制技術の高度化による効率的な都市交通管理についての研究を行いました。ここで、ITS技術の利用可能性と交通管制技術の高度化に関する課題を整理し、効率的運用管理実現の手順を示しました。

その後は、交通現象解析、都市交通政策評価、まちづくりの検討などの課題について、ソフトコンピューティングなどの各種計算機技術を利用した実証的研究を行っています。交通現象解析では、開発した交通シミュレーションシステムを用いて、現実の都市道路網における実証的分析を行っています。また、コミュニティバスの需要喚起策検討や、まちづくり政策検討のために、個々の都市活動者に着目した複雑現象モデル(人工社会)を構成し、局所的相互作用から生じる都市交通現象のメカニズムを分析しています。さらに、知的情報処理(ソフトコンピューティング)の方法論を、都市環境問題の解決に有効利用することを検討し、計算機技術の高度利用方法を進展させています。

■現在の活動紹介

こちらに約2年前に着任してから、エコシステムに関して考える機会が大幅に増加し、特に地球環境問題に関心を持っています。持続可能な低炭素型交通システムの構築に関して、一方、地域活動にも参加しながら検討をしているところです。地方都市のまちづくりに関しては、地域活動のなかで実現した「中心市街地活性化を目指した市内一律100円バス運行社会実験」についての調査分析結果に基づいて、バス交通の再生を検討しています。また、交通シミュレーションに関しても開発を継続しており、地域の交通計画に役立てたいと思っています。

氏名：田中 元清(たなか もときよ)
所属：ランドブレイン株式会社

■略歴

- ・1969年8月 島根県松江市 出身
- ・1993年3月 広島工業大学 工学部 建築学科 卒業
- ・1993年4月 ランドブレイン株式会社 入社 現在に至る

■自己紹介

ランドブレイン株式会社に勤務し、住生活基本計画、公営住宅長寿命化計画、都市計画マスタープラン、緑の基本計画など、住宅都市政策に関する個別計画の策定をはじめ、総合振興計画の策定、観光振興計画の策定、次世代育成支援行動計画の策定、新・省エネルギービジョンの策定、環境基本計画の策定など、地方自治体が策定する地域の振興に関する様々な計画策定に関わっています。

最近では、子どもとワークショップを行う機会も増え、小学生とのみんなが遊びたい公園づくりのワークショップや、高校生との町の将来に関するワークショップなど、子ども達の目線でみた純粋な意見に、気づかされることも多く、いい経験ができています。



これまでは、社外の技術者の皆様と交流する機会も少なかったことから、視野も狭くなりがちでした。これからは、できる限り、様々な場面へ出向いて、交流を活性化させたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

■活動紹介

飯南町集落活性化協議会の取り組み

島根県飯南町において、総合振興計画の策定に関わった事を契機に、一部の地域の活性化への取り組みに参加しています。飯南町では、都市農村交流を主体とし、都市住民の飯南町ファン拡大し、いずれは地域の手間作業(竹林の整備、草刈、祭り・行事など)の支援などに定期的に参加してもらえる仲間として、継続的なつながりを構築していこうという活動で、地域産品(おいしいお米、安全な野菜など)も買って欲しいし、お嫁さんに来てもらいたいし、家族で転入してきて欲しいとも考えており、夢は大きいです。



現在は、民主党の事業仕分けにて、地域の活動に使える支援策が減っていますが、地域の自治振興協議会などと連携して、取り組みを継続させています。

広島市農村活性化コーディネーターへの参加

平成20年度に広島市農政課より「農村活性化コーディネーター」の募集があり、農村の元気づくりに興味があったため、参加いたしました。2年間の研修期間を経て、平成22年3月にコーディネーターに認定されました。

これからは、認定を受けた第1期生5名とともに、農村の元気づくりに関わっていきたくと思っています。

